



第74号
平成21年(2009)
1月18日発行
(年4回発行)

他派との交流

青木秀樹

今年の国民文化祭「連句大会」は茨城県筑西市で十一月八日・九日に開催された。大会は七十席に及ぶ盛会で、小学生・中学生の席が設けられたほか、地元の高校生が一般席に参加し共に連句を楽しんだ。

このような全国規模の大会に参加するのは他の会派の方々と交流することが主たる目的であつて、一座する方々との交流を通して己を知り、猫衰会に理解を得ることが重要である。大ベテランから初心者まで参加する大会は所属する会派も多岐にわたる。連句協会の前身である連句懇話会のもとに全国の主要な連句人が参集したのが一九八二年十一月であり、猫衰会が誕生したのはその翌年であつた。いまの連句人の多数は連句復興期以後に誕生した連句グループに属している。

そのため個人の「連句観」も大きく異なっている。蕉風連句を目指している人が多数であるが、長連歌の自由な精神に戻るべきだと考える人、滑稽性を重視する俳諧を求める人、現代の詩としての連句を目指す人など様々である。連句の式目についても会派によって異なるだけでなく、式目不要を唱える人や式目に無知な人もいる。連句界の著名人でも自己流のやり方を押し通している方がいる。

東明雅先生がくり返し述べられたことは、他流派の方と一座する場合に「猫衰の式目を強制しないこと」であつた。他流派と交流することが重要であつて、式目の正しさを争うことは連句界の復興・発展のためにならないと考えられたからである。

私たちは明雅先生が晩年に整理された「猫衰会式目」に基づいて連句を楽しんでいるが、それは蕉風の流れを受け継ぎながら、現代的な解釈を加えた合理的な連句作法であると信じているからである。以前の式目書などくらべて制約的な意味が少なく、こうすれば付け・転じ、一卷の序破急などの構成がうまく図れるという「ノウハウ集」としての意味が大きいからである。私たちは自分が絶対に正しく他は間違っているという「一神教的な排他主義」に陥ることは避けなければならぬ。猫衰会のメンバーの実力が認められれば、猫衰式の連句のやり方が次第に広まることが期待されるからである。

捌を務める場合でも、連衆として参加する場合でも、猫衰の式目を強要・強制する態度を示さないことが肝心である。一卷の進行は捌の権限であるので連衆はその捌の指揮に従うことが礼儀である。独特の考えの捌き手に当たった場合、その捌を反面教師として、自分が明雅先生の教えを正しく実践しているかどうか自省する時間としたらよいと思う。

どのような立場でも、「座を楽しくする」ように努めることが連句人として一流になる道であろう。

(訂正)

前号の「俳席のマナー」の文中、「俳諧無言抄」を(応其著 慶長八年)としたのは誤り。『俳諧無言抄』は梅翁著 延宝二年(一六七四)、『無言抄』応其著 慶長八年(一六〇三)と混同しました。

なお、応其(おうご)は『朝日歴史人物辞典』の記載を要約すると、「安土桃山時代の木食僧。近江の武士の家に生まれたが主君が没落。高野山で出家して客僧となり五穀を絶つ木食行に専念した。その後仁和寺に入り阿闍梨位を受ける。秀吉の信任を得て戦の講和や高野山の再興に尽くした。連歌を里村紹巴に習い、連歌をよくするとともに連歌の式目・作法を記した『無言抄』を著し、紹巴の校閲を受け慶長八年に開板された。」とある。『無言抄』は写本も多く残っており、後の俳諧作法書に大きな影響を与えたと言われている。

頌春 二〇〇九年元旦

歳旦三つ物

生々庵秀樹

日本が好きと思へる初御空

寄席開きとて祀る撫牛

宝貝双児の孫は健やかに

臥猫庵千町

境内の撫で牛に射す初日かな

屠蘇に染みたるかはらけの紅

リサイクル花の盛りに開くらん

房連庵麻子

初夢や白牛います善光寺

マンシヨンのドア小さき輪飾

風光る海に漁る人見えて

緑華亭孝子

手の中に生るる初日や楽茶碗

岩間清らに汲みし若水

飛花落花ピカソの牡牛地を蹴つて

涼月庵あかり

去年今年楽しき想ひ溢れける

東京タワー淑気満ち満ち

草龜の視線動かす何ならん

久慈庵弘子

人生の軌道修正恵方道

牛の背をなで祈る初年

花吹雪清き流れの久慈川に

冬霞庵淳子

いにしへの恋ちりばめて歌留多かな

鴛鴦の水脈ひく初風の湖

草原を牛追ふ童のどらかに

貝母亭清子

言祝ぎて賀状の牛の誇らしげ

餅花飾り床の静寧

青き踏みいっさんばらりこ遊ぶらん

袖菊亭好敏

読初めや目からウロコの近代史

ふくら雀のとまるペランダ

紫木蓮丹精すれば芽を着けて

爽楽庵路子

ゆったりとお代りをする雑煮かな

屠蘇器に満たす肥後の赤酒

胃を持たず二十五年を生き延びて

朱鷺庵文子

初鷄に牛も佳き声返しけり

祝太郎の満たす大甕

忘れ得ぬひとに逢はむと海越えて

(名簿順)

寒山寺の鐘

東明雅

私は日本では晴男はれおとことして通っているが、中国では通用しないらしい。尤も、この旅行の時期が五月の末から六月の始めにかけて、中国も麦秋のころであり、同時に梅雨の季節でもあるので、この旅中雨に悩まされたのも、むしろ当然のことだったかも知れない。五月三十日正午すぎ、蘇州站（駅）で火車（ジーゼル車）を下り、早速バスで寒山寺に向った時は、今にも泣き出しそうな空模様であった。寒山寺の名物の鐘は、黄色く塗ったわりに小さい鐘楼の二階に収まっていた。古いけれども何の変哲もない、中国風の鐘である。お金を出せば撞かせてくれるそうで、そう言えば、境内に入ってから鐘声が絶えまなく響いていた。ガイドさんが、この鐘を三度ならずと、一に十歳若くなり、二に幸せになり、三に金持ちになると言う。まるで日本の無間の鐘むげのかねの伝説と同じで、もちろん、こちらの方が元祖なのだろう。私も撞いてみたが、日本の梵鐘のいわば沈鬱・荘重な音に対して、軽くて高い響き、鐘楼を出ると雨が落ちていた。しかし、この鐘の音が、凡そ千年前、科挙の試験

に落第して、郷里に帰る失意の青年張継の耳には、余韻嫋々、憐れにも悲しくも聞こえたのであろう。

張継

月落烏啼霜滿天

江楓漁火對愁眠

姑蘇城外寒山寺

夜半鐘聲到客船

あまりにも有名なこの詩、中国では小学校の生徒に必ず教えて、一種の勸学の詩としているそうであるが、地下の張継先生は生前、夢想もしなかったことであろう。

張継という詩人は、この楓橋夜泊の詩の外には殆ど作品は残していない。たったこの一首のために、彼の名はまさに千載の後まで残り、外国（日本）にまで轟いたのであるから、当人はもって瞑すべきであり、寒山寺の鐘もとんだ功德を施したものである。

とすれば、同じ鐘を聞くにも、天氣が快晴でなくて、じとじとと陰鬱な日和であったのは、この詩の気分を味わうにはやや通うところがあったかも知れない。

ところで、この寺の名の寒山寺とは何か、寒山とは「広辞苑」によれば、

唐の僧。国清三隱の一。天台山の近くに捨得（じつとく）と共に住み、奇行が多く、

豊干（ぶかん）に師事したと伝える。その

詩は「寒山詩」に収載。文殊の化身と称され、画題にされる。生没年未詳とあり、ついでに、「寒山捨得」という項には、

①寒山と捨得と。②（画題）寒山・捨得の飄逸な姿を組み合わせた中国・日本画の題材の一。鎌倉末期以後、漢画系諸流や狩野画家たちに好まれた。寒山は経巻を披き、捨得は箒を持つ図様が多い。③坪内逍遙作の舞踊劇。寒山・捨得の洒脱な生活を叙したものの。明治四四年初演。

右の説明で不十分な方には、森鷗外の短編小説「寒山捨得」を一読されるようにすすめる。これが流石に一番分かりやすい。

私は旅から帰って、改めて寒山の詩を読み返してみた。その詩は山林幽隱のよろこびを詠じたものの外に、民衆を相手に具体的・現実的な教訓を詠んだもの、また、当然のことながら仏教、ことに禅の悟りについて述べたものなど区々で、到底例の蓬髮弊衣の乞食僧寒山一人の作とは思えない。要するに寒山は伝説上の人物に過ぎないのである。そのような寒山寺が有名になったのはひとえに「楓橋夜泊」の詩によるもので、張継も寒山寺に大きな功德を施していると言うべきである。

ねこみの通信 第二十号より転載

猫養会平成二十年度正式俳諧配役

第二十九回俳諧芭蕉忌正式俳諧

俳諧之連歌

脇起二十韻「冬ごもり」

冬ごもりまたよりそはん此はしら 翁

鶴の渡りを知らせたる文 千町

ジオラマで近未来都市作られて 佳之子

自由自在の風呂敷を持ち 碧

ウ どの色にあなたは塗るのあの月を 鐵男

白粉もあり爪紅もあり アンズ

秋裕熱年好むよろけ編 路子

いきなりにくる魔女の一撃 恭子

液晶にナウマン象は甦る わこ

グランドキャニオンセスナ機の飛ぶ 雅子

ナオ夏館隠れ家にした防空壕 有子

青き満月囀と眺めて 遊民

南無阿弥陀母は佛を子は文字を 暁巳

旅でうれしき美人相席 酔山

酔ふほどに恋の垣根の低くなり 千恵子

あつけらかんと転職をする 昭

ナウ手品師は金貨ざくざく取り出して 未悠

漫画に学ぶ料峭の意味 明子

早咲きの若木の花は生々と 秀樹

キャッチボールに風光る頃 執筆

明雅忌脇起二十韻

「穂芒や」

坂本孝子 撰

穂芒や呆け極まれば光るなり 明雅仏

月に水脈ひく初鴨の群 孝子

後の雛組紐美しく開くらん 恭子

塗腕の蓋紙に紛れし 明子

峠越え木曾路すたすた辿る旅 忠史

ウ コックローチダンスで出来たお仲間 啓子

やきもちと情で暮らす三年目 恭

鼻のふくらむ奴の大嘘 啓

ルクソール神殿空つ風すさみ 明

蟻螂枯れて絶る石段 史

ナオ箏筒株贈与しやうか電子化か 恭

調律笛の悩む半音 明

ファッションは誰の好みか黒づくめ 史

腿のタトゥーに緋鯉泳がせ 明

外寝する月いっぱいの湾の中 恭

天幕住まひに夢もあります 史

ナウ国会は政教分離にもめてをり 恭

野次の渦巻く春の本場所 史

支へ合ひ花爛漫の大茶盛 啓

ノーベル賞に酔ふもうららか 執筆

連衆 式田恭子 野口明子 根津忠史

小池啓子

実技指導

臥猫庵千町宗匠

「味はひは」

副島久美子 捌

味はひは虚美皮膜の新酒かな 明雅仏
 名残の月に弾む清談 久美子
 ウィンドー案山子はしゃれたベスト着て 美恵
 煙草の吸へる場所を探しぬ 靖子
 解散を捻れ国会直したい 遊民
 他人にさせればとける知恵の輪 暁巳
 ロクサアヌほんとはどちらが好きなのか 同
 ハートマークのちよつと歪んで 民
 素つ裸しゃばんの泡に包まれる 恵
 入道雲の育つのを指す 靖
 ナオステカの遺跡天まで王の墓 巳
 博物館は盗掘の山 恵
 腰弁当にぎり飯にはかなひません 民
 握手は懐炉ほどのぬくもり 恵
 道行の月は冴え冴えあの世まで 民
 川の向うに見える教会 靖
 ナウ素粒子とは迷子探しのことかしら 巳
 剪毛期とて逃げ回る山羊 恵
 花浴びて洛中洛外旅にあり 靖
 ひいふうみいと揺らすふらここ 同

連衆 山口美恵 関口靖子 内田遊民
 島村暁巳

「風狂の」

橋 文字 捌

風狂の旅始まるや竹の春 明雅仏
 澄み渡る空ひとりゆく月 文字
 虫の声クローゼットの其処此処に 良子
 サウスポーにて靴を磨く児 鐵男
 土捏ねる次兄忽ち上達し 未悠
 困難に耐へ守る伝統 美紗
 追はれれば逃げたくなりぬ熱帯夜 良
 金魚の姫を救ふ宗介 紗
 それからの経緯を問ふ円覚寺 良
 郵便番号三桁でよい 男
 ナオ乾盃は鱧酒でする同窓会 悠
 まだ独り身でゐると目を伏せ 男
 武士の裔肥後もつこすの愛一途 紗
 恋の南仏シャンソンと夢 文
 夏の霜敗者復活戦に勝ち 紗
 長元坊と籠る山中 男
 ナウ乱高下する株の所為不整脈 悠
 新車カタログ開く料峭 男
 潮満玉潮干玉に花ぶぶき 良
 装束籬の絵緯金銀 悠

連衆 本屋良子 林 鐵男 棚町未悠
 根津美紗

「黄金の留金」

長崎和代 捌

爽やかや黄金の留金旅鞆 明雅仏
 メダルの様な月にみせばや 和代
 煙除け秋刀魚の歌を唄ふらん 泉子
 小さき前掛似合ふ姉妹 弘子
 それぞれの歪みよろしき備前焼 央子
 可杯を差しつ差されつ 昭
 光量を少し落してはいポーズ 常義
 雲の峰立つ沖の鳥影 義
 産卵の場所を求めて正覚坊 泉
 不惑の息子還暦の母 央
 ナオ強制の後期高齢仲間入り 昭
 リズム体操オフのビートで 泉
 伸ばしても縮めてももうたまらない 央
 肩を寄せ合ひ櫛で教会 昭
 寒月に忘れた筈の名を呼びて 泉
 水琴窟の響く庭園 義
 ナウ尺八の音の滔々と恩師の忌 央
 春のシヨールをふうはりとかけ 弘
 花明り路地を抜ければ古書の街 義
 風船売りが一休みする 弘

連衆 青木泉子 市野沢弘子 遠藤央子
 松原 昭 生田日常義

「豊の秋」

杉山壽子 捌

蓬萊にこの神在し豊の秋

明雅仏

冬待つ杜に玉砂利の音

壽子

十三夜子らに童話を聞かせめて

郁子

抱き心地よきうちのブードル

雅子

マンシヨンの隣の部屋は作家なり

醉山

野菜づくりが大好きと言ふ

志世子

土地柄か彼女が恋の指南役

山

訛ることは解らずもよし

雅

夏袴竜馬みつむる海閑か

郁

斜めにかまへすする甘酒

世

ナオノーベル賞寡黙冗舌名古屋から

雅

碁盤割とはセレブ住む町

壽

思はざる旅を誘はれ気もそぞろ

郁

胸もぬくもる炬燵二人で

世

池の面をしどりの水脈ゆらす月

雅

近くの店は自転車で行く

山

ナウ四十年尺八奏でひたすらに

雅

天眼鏡は後生大事と

世

育ちたる若木の花はいま盛る

壽

おだやかに笑む故里の山

雅

連衆 東 郁子 武井雅子 吉田醉山

秋山志世子

「紫式部か」

松本 碧 捌

色も香も紫式部か小式部か

明雅仏

雲井を照らす千年の月

碧

運動会家中そろひ応援に

達子

携帯カメラ振りかざしをり

政志

ウ 船の上思ふは今宵のコスチューム

敬子

管弦楽団甘い演奏

あや

わがが好き二人でちよつと道はずす

同

酒場横丁いまはなつかし

達

水母釣り忘れた頃にノーベル賞

碧

異国の電車走る箱庭

志

ナオ京町屋共同生活うまくゆき

や

朝な夕なに哲学の道

敬

おはじきの少女いつしか大人びて

志

移しっこするしつっこい風邪

や

寒の月呆けと突っ込み噛み合はず

達

遺言状を書き替へる癖

や

ナウわたしだけ睨んであるよ閻魔さま

志

土筆がひよいと頭すくめる

敬

唐物の旅の硯に花の片

碧

子猫ぐつすりポケットのなか

達

連衆 篠原達子 峯田政志 須賀敬子

中林あや

「穂芒や」

鈴木千恵子 捌

穂芒や呆け極まれば光るなり

明雅仏

名残の月の覗く雲合

千恵子

園児らに蜂の子めしをふるまひて

佳之子

恐れ知らずは先祖代々

弘子

ウ 阿弥陀仏笑まふ御堂でひと眠り

美友紀

後輩連れて悪所通ひを

秀樹

左右から手の忍び込む身八口

弘

深度九〇〇日本海溝

樹

万緑の上駆け抜けてグライダー

紀

白髪太郎の繭を見つけぬ

之

ナオ長老に昔咄を聞く夕べ

樹

行李の底に七つ釦が

弘

別れてもメルアド消せぬ女の名

紀

間夫は炬燵でうたた寝のふり

之

灰猫の片目をあけて睨む月

樹

記念写真はいつも端っこ

弘

ナウ旅靴百年未完の教会に

之

ワインの樽が誘ふ春宵

樹

旧友の渾名飛び交ふ花の中

千

初虹立ちて軽き口笛

紀

連衆 染谷佳之子 松原弘子

奥野美友紀 青木秀樹

「俳諧の大橋」

川名将義 捌

俳諧の大橋架り菊日和

明雅 仏

忍び笑ひぬ月の雁かりがね

将義

耳すますほどにいよいよ秋澄みて

アンズ

クロスワードのマガジンを買ふ

千町

ウ パソコンのホームページは出会ひの場

吉文

年を隠せり夫も隠せり

英子

自画像をやたら美人に描いてみる

同

氷あづきは水泡に帰し

義

どんと鳴り鍵屋玉屋の高き声

町

こっそり登る寺の山門

同

ナオ基礎物理学宇宙解明ノーベル賞

英

こんな小さきものに命よ

ア

細き月狐啼く夜の針仕事

町

*雪女郎から風邪をうつされ

文

蘭引でたらりとろりの媚薬にて

町

四十八手に加ふ八百長

義

ナウテキーラで気持ち良く酔ふマタドール

文

ふっと醒めたる蝶となる夢

町

遅咲きの花淡淡と富士に佇ち

ア

待っていました殺雨たつぷり

英

※蘭引(ポルトガル語の転用)蒸留用の器具。

連衆 松島アンズ 原町千町 永田吉文

佐古英子

「恋さまさま」

鈴木了斎 捌

秋灯恋さまさまの七部集

明雅 仏

何処かで君も見る後の月

了斎

猫じゃらし首筋なでて過ぐるらん

淳子

足じゃんけんのパーは大股

有子

ウ 石畳結願の旗ひるがへり

わこ

確率論に学び吉凶

葵

B型は生まれつきなの変へられず

わ

オルゴールからワルツ流るる

葵

サーカスの熊のステップ揃ひるて

有

文旦漬をお茶請けに出す

淳

ナオ血圧も株も一緒に乱高下

同

千年前はもてたお多福

有

婚活の親と親とが惹かれあひ

斎

筋肉痛と汗の後朝

葵

うすき肩照らして月の涼しけれ

淳

久留米餅に映る今昔

わ

ナウアブサンを砂丘の町に酌み交し

淳

高層仰ぐ春泥の路

有

遠霞はだらに花と翌檜あすなろ

斎

琥珀に虹の眠るとこしへ

葵

連衆 上月淳子 佐々木有子 横山わこ

石川 葵

「旅靴」

横井士郎 捌

爽やかや黄金きんの留め金旅靴

明雅 仏

紅葉押し分けアプト鉄道

士郎

乳を飲み眠る幼に月笑みて

一枝

捲毛をゆるする宵の柔風

美奈子

ウ けふよりは家の主と呼ぶらん

路子

こよなき嫁と周りよろこぶ

實

理科系と文科系とで味な仲

奈

地底の池を透す素粒子

枝

カイツブリ 鳩遙か向うに浮び出て

路

雪雲見ゆる県境の山

實

ナオ莫逆の友と吟じて酒旨し

奈

ひとさし舞へば師もくつろぎぬ

路

薄紅のまなじり僕をつらぬきて

奈

初恋のひと今もねんごろ

實

月の膳跳ねんばかりの鮎岩魚

士

十字を切れば窓にいかづち

枝

ナウ夢乗せてシャガール異次元遊泳す

路

浮かれ猫にも下げる短冊

奈

帝より言葉賜る花の宴

實

のどかに過ごす午後の図書館

枝

連衆 西田一枝 鈴木美奈子 倉本路子

梅田 實

座の凜として 捧ぐ奏楽

吉田酔山

昭和四十一年から尺八を楽しみ、長年いろんなところで演奏してきましたが、俳諧の席で演奏するとは想像していませんでした。

今回、第二十九回芭蕉忌正式俳諧で執筆を立派に務められた生田目常義氏から奏楽の依頼があつた時、つい気軽にお受けしてしまいました。が果たして良かったのかどうか反省しているところです。

生田目氏とのご縁は会社勤めの時からですが、それにも増して、私が十年間開催してきた邦楽の演奏会「邦楽インタラクティブコンサート」で、奥様の美保子様につつと司会を務めていただいたことが、ついお引き受けした理由となります。

奏奏とか伴奏と言えば地唄舞の演奏をすることはあります。「ゆき」とか「黒髪」。三絃と箏に絡まるように絃方の艶やかな声を邪魔しないようにそつと寄り添っていく奏法です。今回は執筆の動作を引き立たせ、なおかつ会場を厳肅な雰囲気にしなければならぬ演奏でした。「越天楽」は指定曲。他はまかせて頂きました。艶やかではいけない。厳しく

清澄な曲が相応しい。となれば尺八のための古典本曲です。

尺八本来の技法を活かし、森厳とした神秘的な自然を呼び込み、淡々と心静かに吹奏しようとした。

生田目氏の所作を追いながら無心で吹きました。生田目氏の動作は堂々としていて見事なものでした。

古来より正式俳諧に奏楽が付いていたかどうかは存じませんが、音楽の力を見抜き採り入れて下さった先達の感性に敬服致します。

良い機会を与えて下さった生田目氏、青木会長、それに素適な錦の尺八袋を縫って下さった本屋さん、ほか会員の皆様深く感謝申し上げます。

袴着の稽古

転石

二十年九月の白露もいささか過ぎた頃合、深川芭蕉記念館で爽楽庵路子宗匠の肝煎りにて胴着、袴の着け方の稽古が行われた。正式俳諧のお役を務める時は、ほとんどの男性の場合いつも爽楽庵や式田事務局長あるいは他の方のお世話になつて装束を身に着けている

が、せめて帯や袴の着け方の基本なりと自分の手で出来るようにとの親心から今回の稽古となつた。

おっとり刀で駆けつけた私も懇切なご指導を頂いたが、なにせ和服の世界とは日頃無縁な環境にあることとて大汗をかきながらの稽古となつた。角帯を後手で結ぶなどというマジックのような事は思いも寄らず、前で結んで後ろへ廻すという秘技などもあり、幼児の頃などを思い起こして微笑であつたが、曲がりなりにも自分ひとりで衣装を着けることが出来るようになったのは祝着至極であつた。

広重名所江戸百景「下谷広小路」(安政三年)のなかではズボンを履いて現在の上野松坂屋の界隈を歩く武士が描かれている。輸入されてまもないこのスタイルが新奇さ、動きやすさで若い武士の間にたちどころに広まったという。

日本人の西洋好き、新しもの好きはこの時代から胚胎しているようだが、かくして洋装万能の世の中となつた現今、羽織・袴といふこの伝統衣装は今後どうなっていくのかなと深川の川風に吹かれながらぼんやりと思案した。

追悼 梓庵中川哲宗匠

「魚やの酒」

時雨来て魚ととの酒となりけり 鈴木美奈子
 義太夫洩る、冬ざれの町 佛淵雀羅
 高速路くぐれば見ゆる灯に 鈴木了齋
 やはらかき笑みままるの月 村山和津枝
 や、寒に着せかけてやるカーディガン 豊田好敏
 集ひの膳に鯖鮎をつけ 上月淳子
 しつかりと閉めたつもの裏の木戸 青木秀樹
 一村同姓恋の混沌 近藤守男
 惚れ直すわけはお前の柔き肌 式田恭子
 作務衣のひとがエスコートする 羅
 姐さんを囲むダンディ親衛隊 奈
 そろふ足音ざつくざつくと 齋
 小芝居の幕開き待てる月涼し 中川 凡
 白玉団子のどをつるりと 淳
 ジョーカーはあつちへ去れと恐い顔 樹
 チェンジをするぞこんなときこそ 亀井典明
 うたかたの夢に花降る泉岳寺 恭
 山の向うへ蝶の道行 中川真紀子

平成二十年十一月五日
 於 安楽寺斎場(五反田)

「魚や」というのは新橋にあった呑み屋で、
 哲さんの行きつけの店でした。
 哲さんは、私が四十代の最後の輪にはじめ
 て渋谷連句会に行ったとき、和子さんと好敏
 さんと一緒に連句の手ほどきをしていただき
 ました。その後も和子さんの丁々発止の軽

妙な付け合いはとても魅力的で、一日のお勤
 め帰りの私にはほんとによきオアシスだった
 と、思い出深いものがあります。
 哲さんのご冥福を祈りつつ……
 鈴木美奈子

悼 梓庵 中川 哲 丈

「ゆく秋」

ゆく秋や七つの鐘を聞きすてに 坂本孝子
 菊の香りのただようて来る 原田千町
 坂の町おんぶの吾子に月さして 式田恭子
 蕎麦やの暖簾くぐる連中 孝
 下ろし立て縞の着物の袖を引く 町
 踊るかっぱれ手とり足とり 中川 凡
 竹夫人夢の中にも抱きつつ 恭
 初孫を見に香港の夏 孝
 百の店千の小店の賑やかに 町
 株売買の本が山積 恭
 ナオ掛け声のさびも粋なり大向う 孝
 芸風芸名親ゆづりなる 町
 海ゆかばたまたま出遭ふ鶴の群 恭
 快く酔ふ女正月 孝
 ことごととシチュウの煮える台所 町
 耳そうちして起こす宿六 孝
 ナウ大器なり晩成色を好むなり 孝
 子猫親猫長屋引つ越す 恭
 旅籠開き口上花の下 孝
 うつらうつらとうたた寝の春 孝

平成二十年十一月六日
 於 桐谷斎場

十一月二日、深川連句教室の最中、青木秀
 樹さんの携帯電話が鳴った。中川哲さんの計
 報であった。明雅門の重鎮として貴重な人材
 の他界である。

氏は経営士会の忙しいお仕事傍ら、歌舞
 伎、文楽、映画、その他演劇、芸能一般に造
 詣深く、中川 梓の芸名で語る義太夫の名手
 でもあった。昭和六十二年二月杉並会館での
 「新口村」、平成三年十二月、第一回猫蓑会立
 机式での「お軽・勘平旅立ちの段」の名調子
 は忘れられない。また著書『東京小芝居挽歌』
 には当代の大歌舞伎とは違う明治・大正・昭
 和の東京下町の情景や、小芝居のことが懐か
 しく書き綴られている。平成九年、その出版
 祝賀会がお江戸日本橋亭で催され、竹本朝重
 ・豊沢幸治による「壺坂観音霊験記」が語ら
 れ、賑々しかった情景も思い出として残って
 いる。十二年前、ふとした医療過誤から病を
 得られ、以来愛妻キヌ夫人、ご子息の凡氏夫
 妻の手厚いお世話のもとに過ごす明け暮れで
 あった。いまは明雅先生、正江さん、和子さ
 ん、隆秀さん、しげ子さん等に迎えられ、早
 速一卷に臨まれているのではないだろうか。
 平成二十年十一月二日 享年八十七才 容
 顔美しく穏やかな最期であった。心よりご冥
 福をお祈り致します。 合掌

坂本 孝子

哲賢江

二村文人

中川哲さんは、東明雅先生とは別の意味で私の生き方のお手本だった。私は、東先生の決して威張らない優しい人柄に憧れたが、その一方で哲さんのいかにも東京人らしい洒脱な暮らしぶりに魅力を感じていた。息子の凡さんが生まれたときに、内風呂をなくして銭湯へ行くようにしたという話を聞いて、ああいいなあと思った。初めてお会いしたのは、関口芭蕉庵の連句教室で、前進座の先代河原崎国太郎に似ているというのが第一印象だった。国太郎と面識はないけれども、銀座の「カフェー・プランタン」の御曹司だから、きっと哲さんのような雰囲気があったのだろうと想像している。

すぐに親しく落語や芝居の話をするようになった。と言うよりも、専ら私の知らない昔の話やうかがうのだが、哲さんにそれを押し付けるようなところはなく、「こんな話をしてゴメンナサイだけど」というのが口癖で、遠い時代の興味深い話をしてくださった。先代河原崎権十郎が父親の二代目権十郎の追善狂言で『お祭佐七』をするというので歌舞伎座の幕見席へ行くと、上手の隅に哲さんが陣取って、「山崎屋ア〜」と御機嫌で声を掛け取っていた。私の居ることがわかつては申し訳な

いので、ハネてから挨拶すると、「大変なところを見られちゃった」としきりに照れていた。落語では八代目桂文楽が御贔屓だった。私は哲さんの世代の人が文楽のどこに魅せられたのかを知りたくて何度も尋ねると、「文楽は新しかった」という答えだった。戦前の文学青年や演劇青年にとつて、文楽の落語は新しかったのかと、妙に納得したのを覚えている。

平成三年に私が富山へ赴任してからも、夏の国立劇場で恒例になっていた「澤村宗十郎の会」や「葉月会」でいつも御一緒した。帰りに哲さんと芝居の話をするのが、東京を離れた身には何よりの楽しみだった。昼休みに事務所の近くへお昼を食べに行くと、鯛の兜煮があつたので、堪らず一杯やっている、それを見た女将が「まあ、粹ですなあ」と言ったという話など、つい真似したくなる。鰻の白焼で飲むことも哲さんに教わった。最近、歌舞伎座の脇に「中せん」といういい小料理屋を見つけて、哲さんをお連れしたかったと残念でならない。

哲さん、落語も講談も歌舞伎も文楽も、そして久保田万太郎のことも、もっとお話ししたかったですよ。それにしても、哲さんを引き合わせてくださったのは、ここでもやはり東明雅という存在だった。

悼 梓庵哲宗匠

「永久にほほゑむ」

行く秋の永久にほほゑむ遺影かな 秋山志世子
見送る人を包む菊の香 橘文子
坂がかり無言のままに月浴びて 志

平成二十年十一月六日

於 安楽寺

悼 梓庵哲宗匠

「酌み給へ」

天の美酒娼嬢侍らせ酌み給へ 橘文子
いよつとひと声掛ける地芝居 高橋豊美
菊人形こしらへも佳く立つならん 文
編纂拜命銀行の社史 美
数奇者に惚れて揃ひの赤烏帽子 同
銭湯通ひのぬしも恋猫 文
横櫛の肩に優しく花しだけ 美
霞の中にたゆたへる舟 執筆

平成二十年十一月六日

於 目黒ととや

中川哲さん。粋な人でした。

私が連句を始めたころ、豊田好敏さんに誘われた連句の会で、式田和子先生と哲さんとよく一座させていただきました。哲さんの第一印象は、この人、どういう人だろう、着流しで和服の肩の着こなしがあんまりぴつたりとしていて、どうもこの人は、いわゆる遊び人かしらと。それが、予想外のお堅い商売で、哲さんのエピソードをと、いくら思い出そうとしても、何もありません。

まだ連句初心者の私に対して、今思えば心配りいただいていたのでしようが、絶妙の距離感で、付かず離れず、共に一夜の連句の間を楽しむという姿勢が、見事で、清遊というのは、こういうものかと、肌で感じました。自分が歳をとったら、哲さんと和子先生のように、軽妙洒脱、物にこだわらず争わず若い者に説教しない、こういう達人の境地に達することができたらどうかと、ふと不安になりました。

そのためには、連句を続けること、連句を楽しむことが、芭蕉の俳諧の道に連なることであるのだろうと、勝手に解釈しました。哲さんがそういうことを言ったではありません。そんな理屈など必要なくて、自然に俳諧に遊ぶことができた人。

だから、哲さんは粋な人なんです。

小芝居のそのゆゑ問はん都鳥 高橋豊美

追悼 中川哲宗匠

「江戸っ子」

内田麻子 捌

江戸っ子の君も亡き数暮芝居 内田麻子

倉のあたりにひそと咲く枇杷 高瀬美保

文庫本買ひて乗りくる鈍行に 斎藤久美

母の手づくり胡麻のおむすび 市野沢弘子

ウ いわし雲送電線にかかる月 松本碧

互みにカンデラ霧の山道 五味蓉子

秋深む姉より妹選びたり 橋文子

外向きの性内向きの性 保

裁判員お知らせ来たらどうしやう 碧

フェルメールの部屋の静謐 蓉

ナオ濃き藍の皿に盛りたるビスケット 文

手品師の掌の中に白の鳩 蓉

三日の月草笛鳴らし児等帰る 保

神田祭に運命の女 弘

稚な妻僕が痺いのそこじやない 文

長寿の秘訣ワイン小量 碧

ナウもう直ぐに夢でなくなる宇宙船 蓉

蜥蜴穴より出でてまぶしく 麻

花万朶通と言ふ字をかかげ 弘

和歌さらさらと曲水の宴 保

平成二十年十二月十一日 首尾

於 梶が谷房連庵

猫衰会員名簿の一番目に私の名前がのる様になり、追悼連句を巻くことが多くなりました。朝日カルチャー連句教室の一期生の仲間には、もう他界の席の方がにぎやかに明雅師を囲んでいるのでは、と思う此の頃、長らく御家族の介護を受けられていた中川哲氏もあらへ行かれてしまいました。

房連庵の仲間では、市野沢弘子さんと私は哲氏と同じ時に文台をいただいた仲間として、又私と高瀬美保さんは、三の会のメンバーとして長いお附合がありました。

三の会とは、式田和子さんの肝いりで、年二回の座を幹事持ち廻りで集った会でした。六十三年八月三十一日町田市の高瀬氏、捌哲氏とか、平成二年八月二十九日は、信濃町金屬基金会館の幹事は哲氏で捌は隆秀氏でした。平成三年二月十日は式田邸、後輩の松田義文氏と多恵子夫人が新参加、後に鎌倉の松田邸にもお伺いしたり、若かった凡ちゃん亀さんの加った座もあったり、夏の房連庵へは、浴衣、下駄ばきの哲氏が現れたりと思えば尽きませんが、このメンバーは戦前の東京を知る江戸っ子の会だったのかしらと思ひ返しています。

御芝居の本を出されたり、戦前に自動車を乗り廻されたとか、粋な哲先輩を偲びながら、和やかで楽しい座を共にすることが出来て、本当に有難うございましたとお別れの言葉を申し上げます。

内田麻子

悼 梓庵哲宗匠

揚幕のふはり下りるや眠る山 吉藤一郎

佳き声偲び年惜しむ酒 橋文字

ハンチング特注の品届き来て 橋野代々子

なにせ鎌倉のうらら会は、実作の会場を公民館に移したものの、お酒が飲めない、と、又席料の高い貸し席に戻ったという会です。

和子宗匠、哲宗匠、志げ子宗匠と、酒と酒脱ではひけをとらない三宗匠を揃え、軽味の連句で、花は地味、恋は渋い恋でした。

哲さんは手術後も、よく鎌倉までお出ましになりましたが、お疲れになると少し横になり、むくむくと起きては、さらりと恋句を付ける、ということがよくありました。

芝居や邦楽は言わずもがな、仏像にも造詣が深く、伊賀上野の帰りに、亀山の古刹に立寄り、めったに拝めない観音様に会わせて下さいました。だいこくさんに引き合わせた後は、隅の方で遠慮がちにしておられたのが印象的でした。控えめは常のことでしたが、秋田の、レトロな芝居小屋康楽館での、「音羽屋ア」は草深い小坂町を木挽町に換えるひと声でした。花道の菊五郎もさぞびっくり、喜んだことでしょう。

先に三宗匠、この度哲宗匠を失ったうらら会三人、酒抜きですが続けております。哲さんの恋句思い出しながら。

橋文字

事務局便り

◇亀戸天神正式俳諧

日 平成二十一年四月二十五日頃

時 十二時より十七時(受付十時半より)

場所 亀戸天神社

江東区亀戸三ー六ー一

電話03-3681-0010

正式俳諧終了後二十韻興行

◇平成二十一年同人会

日 平成二十一年六月二十一日(日)

場所 新宿ワシントンホテル新館

◇猫養会例会

日 平成二十一年七月十五日(水)

場所 江東区芭蕉記念館

◇猫養基金にご協力有難うございました。

倉本路子 様 一万円

山寺たつみ様 五千円

基金口座 みづほ銀行新宿新都心支店

猫養基金 普通3376045

◇住所表示変更

松本 碧

〒二二二-〇〇三七

横浜市港北区大倉山五-八-一-二〇九

訃報

平成二十年十一月二日梓庵哲宗匠が逝去されました。
心よりご冥福をお祈りいたします。

◇訂正とお詫び

前号に文字の誤りがありました。ここにお詫びして訂正致します。

一頁 上段 貞亨↓貞享

七頁 下段 和銅↓和同

八頁 中段 五位驚↓五位驚

九頁 中段 脆き↓脆き

中段 標↓標

九頁 下段 礼↓礼

季刊 『猫養通信』第七十四号

発行人 猫養会 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町

二-二十一-十六

編集人 猫養通信編集部